

誦 誦

卷 之 一

物 是 矣

我	常	如	梅	京
黑	教	泉	盛	城
晚	方	言	似	
山	山	水	船	

特 別
 ~5
 6053
 2



八五
6053
2



今所註之二十有六卷每句雖可施註不遑
悉記唯其點有太過不及之不同因到
其處各註之故未有一句無註才看
一二卷不能通全當盪觴以至無底
者也評中有甚誤者粗拾收列一次
如左

- 發句為長點
- 脇句不用正花
- 第三恨字不為難
- 第四不知無誹言



○草舞臺之句見有種々異

○馬廻之句不知打越惡ヲ ○家櫻之句不知無誹言

○生轡之句不知輪廻ヲ ○競狩之句以為馬或棊ト

○山伏之句犯同字ヲ ○眺望之句不改重煩ヲ

此外テ余於葉之差句意吟弄之善惡

不可勝計此所以不可容易看過也

此語削之上與事之結
と推及くともま更治
為右流く名師而世能
強く堅不合同死の句を
ら字ふの意を新お違を
くし候むぬ保昔も
今と正しきい句
又邪ありの發邪の中
及形く我は保の四聲し
色人見免れりる補の
第三とと点四句月表
と改字くのみ事しきと
いりり句点名抄しむ
言葉とくあふら候む
老人見氣よらる外
依れしとと字くふ具
追替何と巻の頭と
鼎紙くはとくら出
く別紙よりく水
後以久

三日月此ありととを折る紙鶴

とか云作ううさう

死のりりりるも葉はむ

杖は切糸のうらみの表ありて

任指とかしり人れととあひ

此いとのあえ福え酒屋なれたお

葉の中舞臺の夜おれらるあり

何とく糸はなふはうらととあ

一
聳れ登る後よ花まゝしうせ
婦の月より鏡も命りたを風き
頭をほきしや又むすよし
秋来くもあ陳阿つこい町造
後宮やんよ月あははやさ
親の目よあまらう知るは今九
すよこころの馬海りりか

一
春のよあれつきゆくあはた
お智れ旅籠の味淡きなり
は眠いはうわと寝んあは極
折紙くいの着るあは場
まぬれ是よ浦の船とれく
秋うと者よらんをぬるあ
いよのけえあは極も春極

社より更な法系のみ奇
来り新を女らわやく練れ内
惑程をくして素 淨定
法くくく又も響よまらるる
人中くそを能乃おほされ
懐心程思のくこ懐きこい
氣と若くく響よ松の下層

山伏のそりうううくう月
おりふ夫はわぬ麻射きり
露をよ極くくく浄取あり
思く来る衣よ澄河くく
死のあれ念佛意よ打こり
つぎうれぬハきく私の手
死深くくく眺るふ現あり

いづれと行く心蝶の翩翩

十九点 梅盛判

いづれと行く心蝶の翩翩
うしあしと行く心蝶の翩翩
うしあしと行く心蝶の翩翩
うしあしと行く心蝶の翩翩
うしあしと行く心蝶の翩翩
うしあしと行く心蝶の翩翩
うしあしと行く心蝶の翩翩
うしあしと行く心蝶の翩翩

發句無点

脇書として詠句のよ
し也連排たる詠句の
句の点とて西やか
く詠法也是一卷の頭
なる句也是是詠句の
人又い失念り

第三房四 平点

ひまのつとりの白平珍也
ひまのつとりの白平珍也
ひまのつとりの白平珍也
ひまのつとりの白平珍也
ひまのつとりの白平珍也
ひまのつとりの白平珍也
ひまのつとりの白平珍也
ひまのつとりの白平珍也

華の舞三卷

脇書として詠句のよ
し也連排たる詠句の
句の点とて西やか
く詠法也是一卷の頭
なる句也是是詠句の
人又い失念り

三日月のあつとる軒の紙を鳥

三日月のあつとる軒の紙を鳥

杖の切并のうらみ雲あり

杖の切并のうらみ雲あり

風船とつとる人かんとつとる

風船とつとる人かんとつとる

新事詠句

一

三

てを意有へしと非
夏結い表は不苦や作
者此自種うまひあす
そく假の心也物も真
行草ありそ草あり
又い詠草草葉と云
るし一は種と同と

後書也と 手珍なり
打ちの脇書と云る
は月教の書と云る
と打ちの書と云る
み書は益白の月と
しうと云は是れ書
入の誤なりと

中みまゝにハ
は白打ちのむむむ
り長点のむむむ
あし白をとて

家さうし 無点むむ
脇書あり白の白
跡の白れむむむ可
行

名草の白
脇書ありむむむ傘
のうけむむむむむ
うこむむむむむむ
まや京のむむむむ
むむむむと田舎の書
のむむむむむむむ

約文一宗はふはら志られ

翠の意は後し枕すし珠

姉の月る鏡けむの心立ぬに

圃のさく又むすふと

秋もあしは陳いつき剛造

残書むとら月のを包けと

親の目ふありむらむらむらむら

孔のさく馬海りり

乱のさくあつてむゆくる所は

お智の籠籠から味淡らむら

け眠ははらむれん氣様

所はくむら若草の場

青

青

竹葉歌を
あかむむむむ

れりしうむむむ

鄙むむむ

むむむ傘の氣

むむむむむむ

まゝぬれ思ふらふ浦を船とれく

舟より若ふ人をもぬまの舟

いづれはくまおれ橋も音あふ

社よりまゐる法東から寄

乱らねの女うわや一練れ内

急転ろくま 仔定

つくりしん 吾息を待
也い句よ誰ニもわ
いづ道の方と定あふ
らせろく書入なりま
やまも

競走 吾息脇書也
たれまをそむわつ海
さく書入あふらふま
あつらふは又定ま
競走のまおれ橋も音
ふ伏の句 年点ま
あふ下下電とわらむ
百人下下文字よま
月とわらむまこつ月
あましく満月斜月降
月と書ゆくやあふ
當句下下文字よま
あふらふはくまおれ
まゝぬれ思ふらふ浦
まゝぬれ思ふらふ浦

はかへん又も響けしるるるる
人中しつゝ船かたれけり

橋心程思のりて橋ささいり

氣と煮くまよれ下層

ふ伏のちりつらうらり月

ねまふ夫つふれ麻射さうり

競走五月昔うらまふしとつらや
又陸つとまをそむわつ海

つれづれに
あふらふはくまおれ

あまのつらきうきくしりあふ

あまのつらきうきくしりあふ

死の系れ句 長四句

作者の自注と云ふ

一予も風之

あまのつらきうきくしりあふ

あまのつらきうきくしりあふ

死の系れ句 平珍也

あまのつらきうきくしりあふ

毛錐印

二十九句 長四 (朱)

芦月庵

似船判

元禄三年五月十日

發句

年魚をり

脇書 是作者の自
作の句と云ふこと
と科と根と自作の
句

第三 年魚をり

脇書 是作者の自
作の句と云ふこと
と科と根と自作の
句

第五 長魚相荷

抄りしり

日月のありきと科紙花

い句のありき

親のりりれりきと科紙花

杖の切糸のりりきと科紙花

何れとやさう人りりきと科紙花

ふりりりりきと科紙花

親のりりりきと科紙花

何れとやさう人りりきと科紙花

親のりりりきと科紙花

何れとやさう人りりきと科紙花

親のりりりきと科紙花

何れとやさう人りりきと科紙花

親のりりりきと科紙花

何れとやさう人りりきと科紙花

親のりりりきと科紙花

踊られり

是科の作者の自
作の句と云ふこと
と科と根と自作の
句

第五 年魚をり

脇書 是作者の自
作の句と云ふこと
と科と根と自作の
句

形勢乃強弱 吾意豈浮
 きてもむとささく句
 の兼よりのかつしよ
 きふ如何但こぢぢ
 此馬廻と強解とぢ
 つまらうや作者の
 自註に武士責いのぞ
 みとけられつとぢ
 む強解よまこす一予
 も是よ同と

一
 乱れいあわつてはゆくあわつて
 如智の強弱の味法をわたり
 此眠いけりちとまらん流極
 所活くまきみ卓れ場
 乱れ是りり浦の新とまて
 船と者ふらんとなる外
 乱れいつてま右に橋と吾あつて

こころいり 無点
 腸書よわやまゆふ
 むと何りぢて競駢
 の夕調和其角点の
 巻よあつてまを

乱れいあわつてはゆくあわつて
 如智の強弱の味法をわたり
 此眠いけりちとまらん流極
 所活くまきみ卓れ場
 乱れ是りり浦の新とまて
 船と者ふらんとなる外
 乱れいつてま右に橋と吾あつて
 乱れいあわつてはゆくあわつて
 如智の強弱の味法をわたり
 此眠いけりちとまらん流極
 所活くまきみ卓れ場
 乱れ是りり浦の新とまて
 船と者ふらんとなる外
 乱れいつてま右に橋と吾あつて

くさつ月
百首尾へくしあや
あつの下文字よま
不苦やと伴あゆや

まぐさる衣
死のそら白
長点作者の自註
まゆらう

山伏のそら白
くさつ月
れりふあけかしの麻射さりか
あやまねく清おゆ
引くまの衣よ道何く
死のあは念佛あまらう
つまきぬらたく船を
死流くまの眺望小沢

くさるそら白
あやまねく清おゆ

引墨正
内長拾
内珍重六

秋藤如泉判

午端午

長月 長は藤原也

句類月の新とい如何
恨むをくくつる首尾
ふつきよ終く再吟

歩んで息まきり

脇 藤原春の点む也

作者も秀逸よおせ
つしきりら短くもよ
ろく予を同く

第三 長点如何

発句よかよふ氣味

あり科は恨のこし

おろしきりらきり

第五 脇書を也

式月入わくこい梅紙鳶

式 ちんちんちんちんちんちん
式 ちんちんちんちんちんちん

式 切并乃うらみいさみ
式 切并乃うらみいさみ

式 住居とほりら人のよき
式 住居とほりら人のよき

式 此のちんちんちんちんちん
式 此のちんちんちんちんちん

式 舞の舞 舞の舞 舞の舞
式 舞の舞 舞の舞 舞の舞

式 舞の舞 舞の舞 舞の舞
式 舞の舞 舞の舞 舞の舞

式 舞の舞 舞の舞 舞の舞
式 舞の舞 舞の舞 舞の舞

式 舞の舞 舞の舞 舞の舞
式 舞の舞 舞の舞 舞の舞

式 舞の舞 舞の舞 舞の舞
式 舞の舞 舞の舞 舞の舞

式 舞の舞 舞の舞 舞の舞
式 舞の舞 舞の舞 舞の舞

式 舞の舞 舞の舞 舞の舞
式 舞の舞 舞の舞 舞の舞

式 舞の舞 舞の舞 舞の舞
式 舞の舞 舞の舞 舞の舞

踊らつてそのの 脇書を

おろしきりらあわよ

い定の連よむら物史

夜し能原何しをいも

平白く揚しきり字を

よかきりらまきり物借

れ中よから類いま

式 舞の舞 舞の舞 舞の舞
式 舞の舞 舞の舞 舞の舞

式 舞の舞 舞の舞 舞の舞
式 舞の舞 舞の舞 舞の舞

式 舞の舞 舞の舞 舞の舞
式 舞の舞 舞の舞 舞の舞

式 舞の舞 舞の舞 舞の舞
式 舞の舞 舞の舞 舞の舞

式 舞の舞 舞の舞 舞の舞
式 舞の舞 舞の舞 舞の舞

式 舞の舞 舞の舞 舞の舞
式 舞の舞 舞の舞 舞の舞

式 舞の舞 舞の舞 舞の舞
式 舞の舞 舞の舞 舞の舞

式 舞の舞 舞の舞 舞の舞
式 舞の舞 舞の舞 舞の舞

式 舞の舞 舞の舞 舞の舞
式 舞の舞 舞の舞 舞の舞

式 舞の舞 舞の舞 舞の舞
式 舞の舞 舞の舞 舞の舞

式 舞の舞 舞の舞 舞の舞
式 舞の舞 舞の舞 舞の舞

式 舞の舞 舞の舞 舞の舞
式 舞の舞 舞の舞 舞の舞

式 舞の舞 舞の舞 舞の舞
式 舞の舞 舞の舞 舞の舞

親の目小のあまの脇書
月のまやけさよまを
こし何れは何れ
よや不審さやけさ
小回とけりこし

音字を点かき
脇書の取奥のまを
みる

流さくろく言忌也
脇書何れ何れ連
誹のま葉いふく
おとつこまはあや
未係く

おとつこ者 言忌なり
脇書何れ何れの若草
よ草外の二字指合と
や珍しやと不聴
い先達の控さけり
。労徒ト書リ
クタヒ

親の目にあまのり却つて今女

月のまやけさよま
こし何れは何れ

可みさくろく馬まじりけり

こ馬一筆置

乱すいあつまゆくさあけ

大井一恒

お智の籠籠の味法さかり

此眠いけりうともしん家様

所 活くまき若草一の場

此書

乱ぬれ曇りよ浦の祈とれ

おとつこ者おとつこを
あまのり

おとつこはまおとつこを
あまのり

おとつこはまおとつこを
あまのり

おとつこはまおとつこを
あまのり

おとつこはまおとつこを
あまのり

おとつこはまおとつこを
あまのり

乳母のこま

後宮御とよ 喜忌の巻
序也如何打あし 踊
大旗いさるる
未修

湖のほとり 家もよふらふらふら

舞の音 後よ花のつら

舞の音 後よ花のつら
婿のつら

踊らるる 又いすふら

秋来くも 西凍あらし 町造

後宮御とよ 月のはや

喜忌の巻 序也
い難介の巻よ

喜忌の巻 序也
川のはつとありい
とつらあし
き水庭を
打付く
た

お智の巻 喜忌の巻

象様の巻 喜忌の巻
最後の巻よ

親の月よあまらるる

すふらあし

舞の音 後よ花のつら

喜忌の巻 序也

お智の巻 喜忌の巻

象様の巻 喜忌の巻

最後の巻よ

春多し思ひつゝ浦新しき

新しき者よとてあはれ

新しきはなほ古き徳と音あは

新しきまゝは法系り奇

新しき新しき女りあやし練の内

新しき新しき事業伴定

修りつゝを 鷹巻
大馬也い新しの巻
よま

新しき新しき又も響よましらるる

いづれも無因あり

人中に新しき新しき

新しき新しき新しき新しき

新しき新しき新しき新しき

新しき新しき新しき新しき

新しき新しき新しき新しき

競駈

くまの月

右二つともを馬巻
伴也脇手あり

海をよほしゆく所始り

山所の長より射るし
こけり

引くまらぬし望行しと終

死のあつ 毎夜夢
作者の自叙より

死のあつ念佛 長しうらこり

一にれき思は何れか
一航の風はるめはと

つれづれとあつし船の持

死の白 長し朱丸
山所の巻より

死の白あつし眺望に視る

くまは行く心標の翩翩

活字二十七点

朱長二

星長二

長五

輪六

沈内

常教判

そとみさく 平魚
家さく
い難おれまことんか
る。

若草 長点如何
おろくろくしをうろく
と結く味いそ点い
るさく 作者れ自録
分明はわくしと後方の
点よし長点

新傳の白 平魚
脇書れ執言水点の
巻よあし
惣く平録長点の
し頭へ手あろろり
不変くさく所よ
ふるく改めくり別て
平点い点川くこの真
わろく也脇書よ録し
て手とくけ又い廢表
と書へく平点いり
とろくろく結く味
いとい道のくさく人
詠ゆくせまう

系種 長点
作者れ自録は同く

親の月よあまするりさく今廿

しりみさく馬まうりわ

引さくあめつしゆくあわら

お智れ強ゆ龍の味清くさくり

此賦うらわとまうん丸極

引しきく若草平の場

長点の思くりふ浦い新くさく

引くさく者くみまわさく外

いさくけは宮右の橋く吾あう

引しりさくはははあのみ

引しりさくははあのみ

引しりさくははあのみ

あまの巻れん

此書

詞ありし風流

長点

文字よんしりさく外

此書

はつらつと

脇書くえくくく一前
尾におわくくまきの
まかかききくくく
まかかきのかき別
をけり

競駢の事

外巻三妻一

あまをきりくきりく松の下巻

あまをきりくきりく松の下巻

山伏おちりつらうくくく月

くく月降行月くくく月
あまの下は行向とくくく

村もあまつふれ麻封さうりく

御所ぬき

眼まよ白意とあまき
めくくまきまのい味
い面白く作者の
自註をすも甲

あまをきりくきりく松の下巻

あまをきりくきりく松の下巻

死のおれ念佛 表くうらあまり

わかれぬ

あまをきりくきりく松の下巻

あまをきりくきりく松の下巻

あまをきりくきりく松の下巻

あまをきりくきりく松の下巻

あまをきりくきりく松の下巻

あまをきりくきりく松の下巻

あまをきりくきりく松の下巻

愚問答滿三十之内

長十四
弥五

舟隻子

我黒判

舟心

こ

發放句 意停めく手息

とらまうと新い句ま
をよまよまよのそゆ
もや一巻の頭をれを
ふくくまひくまか
とせを脇よのよう

脇弟之 善惡の眼す

佐治と 脇書は俳言

ひ批言ありかりとま
くふふあはある連致
の巻なり

み位とわしらむようやで
とつらうわるとこれ
いひく俳言いふえは
と又佐治とあし
い連しるを知りし
あれいよ不反

三日月の何とこい柳を紙巻

毛の毛もりれんも葉の花

杖と切舟のうらうらといまあして

佐治とわしむる人のとまひ

ふいふのちも福し酒をわらう所

あかしの葉巻の衣物花うらうら

お智の白
脇書かうしくとん
ふやうきそり

家さう
脇書排うとくや
けりてりてい
一時軒点の巻ふあ

お智の白
脇書かうしくとん
ふやうきそり

お智の白
脇書かうしくとん
ふやうきそり

お智の白
脇書かうしくとん
ふやうきそり

お智の白
脇書かうしくとん
ふやうきそり

お智の白
脇書かうしくとん
ふやうきそり

お智の白
脇書かうしくとん
ふやうきそり

お智の白
脇書かうしくとん
ふやうきそり

お智の白
脇書かうしくとん
ふやうきそり

お智の白
脇書かうしくとん
ふやうきそり

お智の白
脇書かうしくとん
ふやうきそり

お智の白
脇書かうしくとん
ふやうきそり

お智の白
脇書かうしくとん
ふやうきそり

死しのあれ念佛念ふうららり

死しのあれ念佛念ふうららり

死しのあれ念佛念ふうららり

死しのあれ念佛念ふうららり

死しのあれ念佛念ふうららり

死しのあれ念佛念ふうららり

つぎをくまぬ
藤原の息と見え
この作者の自註し
るをも同く

死しのあれ念佛念ふうららり
脇書の公叔墨西吟
ひと

戲墨三十

内
長 五
朱丸 一
陰丸 一
珍重十一

招鳩軒

方心判

發句 脇書作者の
自注より一係系ふ
とつふとく新い係

第三 五息とて脇
書を也

草の舞卷
脇書は春日の里れ結
とほとわふとわれ并
まうせとく新の結と
字遣ふあまふとて
まよふらうとて
似船の書入とて
罪深

二月月れありとて料と紙書

陽とらと陰とらと
のんむり

花のもとりりりるも葉れ屯

杖と切并のうらみの書ありとて

一句の四拍言
とがサの氣味

傾如河のする人のとてなん

ふとてはく久福し酒危ありとて所

打らりの秋とて
くれとて

草の舞卷のなほありとて心

まよひの里れ結と
はとて

ゆとてふふ今日とてうらむれ

聾のま寝に枕田のうら

姉のうらうら後あかりとてさおとて

踊らうとて又しとてふとて

懐鏡の
髪のとて

秋とてあつとて町造

残雪とてはく月のはらとて

踊らうとて
脇書自注れとて

すみろく 意
長存也 脇書あり
回

親の目ふあまらうきくは今昔

すみろくはさまりり新

親の目ふあまらうきくは今昔

親の目ふあまらうきくは今昔

流様 平珍也 珍
白紙 平珍也の巻よ
考

此眼よりいふ人 流様
小家の流様いりぬ海のもの
大人はこれはいまの
おつとていふれめらるる方
よりいふことおりのり方

春の目ふあまらうきくは今昔

親の目ふあまらうきくは今昔

流様いりぬ海のもの
大人はこれはいまの
おつとていふれめらるる方
よりいふことおりのり方

親の目ふあまらうきくは今昔

親の目ふあまらうきくは今昔

親の目ふあまらうきくは今昔

親の目ふあまらうきくは今昔

社不文 長点
作者の自伝也定
めりてとわり是
本い家向のは合なる
点あり

はらうらうら

脇書よ人傳とあり
むえうらうら 脇書は
よらうらうらては
人論よ定りぬいね
とくうらうら物うら
とくうらうら

ささうらうら 平伝

加茂の五日のつとわきに
うらうらうら競るうら
ささうらうらささうら
巻よさうら

ふ伏のさかうらうら

眼まうらうら 節うら
うらうらうら百草と編
うらうらふ伏のうらうら
うらうらうら又うらうら
うらうらと競馬とやうら
うらうら非伏のうらうら
や

けうらうらうら又も響にうらうら

山響と里のうらうら
人傳うらうらうら

人中うらうらうら死のうらうら

うらうらうらうらうらうらうら

加茂の五日の

うらうらと響うらうらうらうら

ふ伏のさかうらうらうらうら月

うらうらうらうらうら

うらうらうらうらうらうらうら

うらうらうらうらうらうらうら

うらうらうらうらうらうらうら

うらうらうらうらうらうらうら

別巻のうらうらうらうら
うらうらうらうらうら

うらうらうらうらうらうらうら

うらうらうらうらうらうらうら

うらうらうらうらうらうらうら

死のあのを佛

脇書よ作者の自伝よ

うらうらうらうら

うらうらうらうらうら
うらうらうらうらうら
うらうらうらうらうら
うらうらうらうらうら
うらうらうらうらうら
うらうらうらうらうら
うらうらうらうらうら

染點二十九

内 長八
弥五

瓜木

晚山判

